

枕草子諸本の分化と流布

山内益次郎

枕草子の諸本は編纂形態及び本文内容に於て著しい差異がある。雑纂本と類纂本では章段順序及び排列の仕方が異なり、傳能因本、三卷本、前田本、堺本の四大系統によつて章段數、語彙等に大きなちがいがある。編纂形態や章段排列は同じ雑纂本でも傳能因本と三卷本とは幾分異なり、又類纂本の前田本と堺本でも相當出入りがあるが、この事については幾多の研究があつて再説するまでもない。語彙（嚴密には音節數）について統計を擧げると

		日記文を含めて						日記文を除いて					
6	5	4	3	2	1		6	5	4	3	2	1	
能一堺	三一堺	前一堺	三一前	能一前	能一三		能一堺	三一堺	前一堺	三一前	能一三	能一前	
三六・九八	三八・二二	五五・〇〇	六七・〇五	七一・七二	八五・六七%		六〇・〇六	六三・三五	七〇・一二	七六・六五	八〇・一四	八四・四〇%	

（校本枕冊子 上巻の總音節數による）
となり、同一作者による同一名稱の本が、甚しい場合三分の一しか共通していないのである。

このように内容形態の異つた異本が生じた原因としては、先ず著者によつて、草稿本・浄書本等幾種類かの原型本が書かれた事が擧げられる。又、或る時期に異本の集成編纂が行われた事も考えられる。更に傳流の間に於ける散佚や添加、誤脱等の爲に變化した面も少くなかつたであらう。

枕草子の本文が現在のように異文が多くなつたのは相當後代の事に屬し、當初は各系統の原流本同志の親縁性は現在より著しく親密であつたのではないかと思われる。このような分化の著しくない性質をここでは假に渾融性と名づけた。この渾融性が何時頃まで残つて居たか、又、それがどんな過程を通つて分化してきたかについて以下私見を述べてみたい。

（一）初期の枕草子

枕草子の文は成立後數十年に撰進された後拾遺集（一〇七八

年)に三首の歌及びその詞書が出ている。例えば雑二の

大納言行成物語などし侍りけるに内の御物忌にこもればとて
いそぎ歸りてつとめて鳥の聲にもよほされてといひおこせて
侍りければ夜深かりける鳥の聲は函谷關のことにやといひ遣
はしたりけるを立ち歸り是は逢坂の關に侍るとあれはよみ侍
りける
夜をこめて鳥の空音ははかる共よに逢坂の關はゆるさじ

(國歌大觀による)

は枕冊子一三九段「頭辨の職に參り給ひて」(校本枕冊子によ
る。以下同じ)にあり、圈點の部分は枕草子の本文と一致してい
る。此の文は現行の傳能因本、三卷本にあるが、その何れかは判
別できない。同じく後拾遺集雜五の

陸奥守則光(中略)則光心もえでいかにせよとあるぞとま

で来てとひ侍りければよめる

潜きする蟹の在所をそこ也と勤いふなとやめをくはせ劍

(同前)

の文は三卷本、傳能因本兩本の特色を渾融的に持つている。同じ
く哀傷「これをだに」の歌は一四一段「圓融院の御はての年」
にあり、傳能因本、三卷本、前田本の三者の性質を含んでいる。

榮華物語(一〇九二年—一説)の卷三六の「ねあはせ」中の
「ぎしきありさま世のつねならず云々」の文は枕冊子二一四段
「よろつの事よりも」中の要約文と思われ、「清少納言がいひた
るようにめてたしと見ゆ。」と出典を明記しているが、これも四

系統何れの文とも定め難い。

古本説話集(一一三〇年頃)では第十二「清少納言事」(枕冊
子一〇段)第十四「清少納言清水和哥事」(同二八一段)第十
五「道命阿闍梨事」(同二八七段)に見える。此等の文は例えば
第十二の文中

風うちふき雪すこしうちちるほといかにつくへからむと

はなにまかひてちるゆきにととしかたの宰相ないしに

の如く、能因本、三卷本、前田本(塚本缺)の特色を具有してい
る。尚、第十四の後半の文は現行枕草子にない別文である。然し、
人物・テーマ等枕草子に通じるもので、逸文の一種とみなされる。

平康頼の寶物集(一一七八年)上には、

清(少)納言カ枕草子ニハ除目ノ聞書。赤子ノ生レタル。思
ハシキ人ノ文ナントラタニコソ覺東ナキ事ニハ申テ侍ヌ

(續群書類從)

とあるが現行四系統の諸本ではすべて「とくゆかしきもの」に類
聚されている。ただ前田本では二〇段「おほかなきもの」二一
段「とくゆかしきもの」となっていて、寶物集の著者が前田本に
據つて後段の本を誤つて前段の文中に含ませた事も考えられる。
然し他の語句、順位など諸本同一である。

千載集(一一八七)の三首の歌も枕草子の文と共通性をもつて
いる。例えば雑上の

一條院の御時皇后宮に清少納言はじめて侍りける比三月計
に二三日まかり出で侍りけるにかの宮よりつかはされて侍り

ける
 かにして過ぎにし方を過し劍暮しわぶてふ昨日今日哉
 皇后宮定子

御かへし

清少納言

雲の上も暮しかねける春の日を所から共詠めつるかな
 (二)

(國歌大觀による)

この外釋教歌「求めても……」(草子四一段)「上氷あわに結べる……」(同九四段)についてみても、傳能因本、三卷本、前田本(堺本缺)の文の性質を併有している。

無名草子(一一九六)の文は草子一四六段「故殿などおはしまさて」の要約で宰相の君が御前の庭草の茂みは露を置かせる爲故意に残していると答えるエピソードである。しかし、此の文は要約文の爲、草子との共通語彙が少く、傳能因本、三卷本(前田本、堺本は缺章)の何れか定め難い。

八雲御抄(一二二一)の場合は類聚の引用であるため、引例も「山は」「橋は」等十四章段四十九語を數え、又四系統何れも缺章がないので、當時の枕草子の本文を知る貴重な資料を提供している。各系統本に照合してみると、

現三卷本だけにある語——「さとのいち」「をふさのいち」「かはぶちの海」「わすれずの山」

現前田本だけにある語——「ほりえのはし」「おつのうきはし」「うづきのもり」「くるべきのもり」

現堺本だけにある語——「とほぢのさと」「ねざめのさと」

現行本にない語——「あさかげのさと」「そふけ野」

系統本
 同字語
 同語
 同訓語
 以上計
 相當語
 缺語

能因本	三卷本	前田本	堺本
三條西本	陽明本	高野本	寂輸本
二二	七	三三	二九
二四	〇	二二	二九
五六	〇	一四	二九
七	一	五	二
三五	八	三	三
三五	八	四	三
九	一	一	七
五	四	一	八
	〇	一	九

(列聖全集 八雲御抄による)

となり、最も共通語の多いのは前田本で、以下三卷本二類、傳能因本慶安刊本が之に次ぎ堺本が比較的少い。しかし三卷本二類や傳能因本の活字本は他系統本との集成的な影響を受けた後の本文を持つているので、嚴密には當時の姿そのままとは言えない。しかし何れにしても此の表をみても八雲御抄の原據となつたのがどの系統本であるかは断定できない。

又、八雲御抄は枕草子の外相當多くの文献を参照して編纂されたものであり、普通引用の場合を考えても。或る一冊の枕草子に

據つたと思われる。當時既に多くの異本があつたとしても、數冊を交互に引用される事は先ずなかつたと思われる。例えば八雲御抄の里の引用にしても「あさかの里」→(能・前本)「あぶさかの里」→(三卷本)「ねざめの里」→(堺本)「ながのの里」→(前・堺本)となつていて現行本では四系統すべての本が揃わないと引用できなくなつてゐるが、順徳院がそんな煩雜な引用をされたとは思えない。従つて、八雲御抄の原據となつた枕草子は、現行四系統の特色を併せ持った渾融的な本であつたと推定される。

以上の外、禁祕抄(一一二二)中の一三八段「故殿の御ために」よりの引用は傳能因本、三卷本(前・堺本缺章)の性質を併有し、十訓抄(一二五二)の引用文は七八段「香爐峯の雪」から引かれて、傳能因本・三卷本・前田本(堺本缺章)の三系統何れとも分ち難い。古今著聞集(一二五四)には二〇段「清涼殿」の「良の」及び二九二段「大納言殿参りて」兩章よりの引用があるが二文とも要約文でどの系統の文か分ち難い。

以上舉げた例は大體平安後期から鎌倉中期に書かれた著作中にあり、何れも渾融的で現行諸系統の何れか一つに據つたと断定できるものがない。しかし此の時代に枕草子は全く未分化であつたのではなく、現行の諸系統の原流本は既に存在してゐたと思われる。傳能因本の奥書にある「能因所持云々」を信じるならば傳能因本の原流本は能因歿の一〇五八年—一説—頃には存在し、又三卷本の奥書にある安貞二年は一二二八年で八雲御抄著作の數年後である。前田本の成立も二條爲氏筆とすれば一二八六年までには

書かれて居たわけで、堺本も前田本の原據となつてゐるとすれば既に此の時代には流布してゐたわけである。

従つて此の時代に引用された枕草子の本文が渾融的であるのは、當時各系統の共通祖本的な本があつたのではなく、これらの原流本は分化はしていても各系統間の共通性が強く残り、現在程内容的な差異が著しくなかつたと思われる。

(二) 諸本の分化と流布

—堺本の分化—

堺本の名稱の原據である「泉の堺に世にそむきたる……好事の佳士道巴といふ翁の……持なれたる本を云々」の奥書があるものに、高野博士舊藏本・舊臺北大學舊藏本・山井我足軒自筆本・無窮會文庫藏本・靜嘉堂文庫藏本等があり、又群書類從所收の後光嚴院宸翰本の奥書と共通する京都大學藏本・宮内廳書陵部藏本は宸翰本系と呼ばれてゐる。これらの兩グループは夫々奥書だけでなく本文内容にも共通性が多く、堺本系統内の二グループを形成してゐるが、無窮本は冊の分け方や本文に宸翰本的傾向が強く、又宸翰本を参照した旨の識語が外にあつて、兩者の中間的性格をもつてゐる。以上の外にも奥書のない紅梅文庫藏本や、異つた奥書をもつ鈴鹿氏藏本・三時知恩寺藏本・前田家四季物語藏之由ノ書(堺前本と略稱する)等があるが、之等の諸本の性格を知る爲に、本文の異同について統計してみると次の表が得られる。

(註一) 高と臺一〇五二語は異文中、一〇五二語が兩者共通して

		高	臺	山	鈴	紅	時	無	宸	京	圖
共通異文數	高臺	1052語	⑦位	⑤	⑫	⑨	⑥	⑳	㉑	㉒	㉓
	山鈴	1089	909	⑬	⑰	⑭	⑧	㉔	㉕	㉖	㉗
	紅時	930	830	793		④	㉘	㉙	㉚	㉛	㉜
	無宸	1013	906	872	1141		⑪	⑮	㉞	㉟	㊱
	京圖	1057	1034	999	787	993		㉡	㉢	㉣	㉤
		808	718	692	810	892	787		㉦	㉧	㉨
		586	502	490	640	695	562	587		㉩	㉪
		520	435	424	566	627	492	814	1183		㉫
		551	468	459	596	656	528	853	1210	1142	
共通順位	1	山時臺紅鈴無宸圖京	高時山紅鈴無宸圖京	高時臺紅鈴無宸圖京	紅高臺無山時宸圖京	鈴高時臺無山宸圖京	高臺山紅鈴無宸圖京	紅宸圖京鈴高時臺山	圖京無紅高時鈴臺山	宸圖無紅鈴高時臺山	宸京無紅鈴高時臺山
	2										
	3										
	4										
	5										
	6										
	7										
	8										
	9										

いる事を示し、高と臺⑦位は一〇本四五關係中兩本の共通度が第七位である事を示す。又共通順位は高野本の場合は山時臺……の順に共通語彙が多い事を示す。此の統計は校本枕草子上巻所收の堺本の本文中、ここに擧げられた十本の本文に缺章のないもの全部につき統計したものである。此の表で見ても、例えば高野本は山井本、臺北本等と共通度が高く、宸翰本は圖寮本、京大本等に最も近い事が表れている。従つて逆にこの表によつて諸本の親近性を推定する一助とする事もできるわけである。これで見ると、鈴鹿本と紅梅本は極めて共通度高く、又高野本グループに近い事が分り、三時本は高野本臺北本等矢張り高野本グループである事が知られる。又無窮本は紅梅本や宸翰本系により近いけれども、共通異文が他本の場合のように極端な開きがなく、比較的どの本にも平均して共通している事を示している。

備考。上巻のみの統計を擧げたのは校本枕草子未完結の爲である。しかし、これでも全體的傾向は大體察知できる。これは任意抽出の統計についても言えるが、試みに上巻の半數統計と上巻全體との統計を比較してみると全體平均として二%弱の差異に止まる。

二本の親縁性を知る爲にはよく、その二本だけが共有している異文を探す事が行われるがその中主なものを擧げると

高と臺 二語・高と山三三・高と時 六・臺と山 二・臺と鈴 二・臺と時 五・鈴と紅 五五・鈴と宸 三・鈴と京 四・紅と無 四・無と圖 三・宸と京 一八・宸と圖 一五・京と圖 一五語

となつていて、(以上校本枕冊子上巻中の語句につき)成立や影響関係を知る一助となる。

堺本は他系統にある日記的章段を缺いているが、(一章だけある)、系統内諸本の中にはその他にも缺章の多いものがある。古典文庫本堺本枕冊子の章段わけに従つて諸本の章段数を比較すると次のようである。

章 段	一 段	
	一九二〇六二〇八二一一二五五二八二	
高・臺・山・鈴	上巻	下巻
紅・時		(封付)
堺 前 本		
静 嘉 堂 本	上巻	下巻
無 窮 本		
宸・京・圖		

この表によると、高野本系と宸翰本系では冊の分け方も異なり、紅梅本、三時本は上巻だけが残り堺前本、静嘉堂本は下巻だけが残っている事が分る。此の冊の分け方をみても堺前本と静嘉堂本は高野本系に屬する事が分るが、更に本文、奥書等について検討してみると、堺前本は鈴鹿本に最も近く、此の傾向は又紅梅本と甚だ似ている。即ち、校本枕冊子所収の堺前本の共通異文と前表の紅梅本の共通異文を對照してみると、

	鈴	高	臺	無	山	宸	圖	京
紅梅本	二四二	一〇三	九六	八九	八七	六五	六五	六七
堺前本	①八〇	③三五	②四	⑤五	④三	⑧四	⑦三	⑥四〇

となり、共通順位は紅梅本が最も似ている。又、二本だけに共通する異文を探してみると鈴と紅五五に對し鈴と堺前三二語が見られその他、無く紅四語に對し、無く堺前一語の外は兩本とも他に二本共通の異文がない。尚紅梅本所持者が前田姓であり、堺前本も前田家所藏である點も兩本の關係が密接な事を物語っている。

以上の點からみて、兩本は極めて親縁關係が深い事が分るが、更に紅梅本の末尾と、堺前本の冒頭の句を比べてみると、紅梅本は一九二段「なをみるにかへさこそは」の段の「日はいてきたれと……いりてきかむともこそ」で終り、堺前本は同章段「よるもめをさまし」から始まつている。この箇所は他系統本及び宸翰本系では「いかてきかんとめをさまし」とつづく所で恐らく紅梅本等では文の結尾としてふさわしくないで「ともこそ」と終止の形を後でつけたものだと思われる。こう考えてくると紅梅本と堺前本とはもともと一冊であつたものが分れたのではないかとの推定も許されるかも知れない。もつとも兩本は現在の形では、本の體裁も異なり、書體もちがっているが、それは傳流の間に個別に變化したのであると考えられる。「尚、堺前本の封付の部分は冒頭の後藤演乘書狀にあるように三四十枚分であつた事が、尊經閣複製本と古典文庫堺本枕冊子の字數を比較する事によつて證明される。」

静嘉堂本は校本枕冊子には校合してないので、前記のような比較はできないが、奥書は殆んど臺北本等と同じで外に慶長十五年書寫の識語がある。本文は袋綴の一丁の裏に始まり（表は白紙のまま）二〇七段「松たかきひんかし南の」の章の途中の文から書き出されている。恐らく始めの部分は（堺前本と同じく下巻一九二段から始まったのが）原本が散佚していたものと思われる。本文は最も臺北本に似ているが、かなづかいの統一（例えば「むん・お・を等」を志した爲他本にない独自の語句も見られる。堺本枕冊子（古典文庫）及び校本枕冊子の本文と比較して統計をして次の結果が得られた。

二〇七段	堺本	枕冊子	校本	枕冊子
	共通異文	二本だけ	共通異文	二本だけ
二五二段	高野本	一二四	二	三〇九
	臺北本	一六四	七二	三七三
	山井本			二四〇
	鈴鹿本	五二	五	一八七
	無窮本	六六	一	一六八
獨自かなづかい				六五

これで見ると静嘉堂本は臺北本に最も近く、次いで高野本とも共通性が多い。田中重太郎氏は、校本枕冊子の解説で、三時本は高野本、臺北本ことに臺北本にもつとも近いとして、臺北本と三時本だけの共通語を例示されているが、静嘉堂本についても同様の事が言えるのである。此の點では、三時本と静嘉堂本も原流本は

同一の本であつたとの推定も或いは可能であろう。

—— 堺本の校訂による變化 ——

同じ祖本から出た本でも、誤脱はなくても漸次本文が變化化して行くのは、異つた時期に異つた本によつて校訂されるからである。例えば三時本と紅梅本の場合、前者は主として前田本等の影響をうけ、後者は鈴鹿本等の影響をうけている。紅梅本が鈴鹿本の影響を多くうけている事は、前に述べたように兩者だけの共通語が非常に多い事で知られるが、鈴鹿本には前田本だけに共通する語彙が多くあり、又紅梅本・鈴鹿本・前田本と三者共有の語句も見られるので、先ず鈴鹿本が前田本と第一次交渉を遂げた後、紅梅本に影響を與えたと思われる。「鈴鹿本の奥書にある諸本校合は現在本書寫の際の校合でいわば第二次交渉である。」

一方、三時本は臺北本・高野本に非常に似ているが、全く同文ではなく三卷本等の影響も認められるので、これを第一次的變貌と言えよう。ところが後に前田本によつて第二次的な變貌を行つた。これが現行本には書入やミセケチとして校訂の跡を止めている。「書入やミセケチ一八〇例の中、一五〇例は前田本で、他は誤脱訂正等諸本にない校訂である。」何れも前田本又は前田本の影響をうけた鈴鹿本による校訂でありながら、結果としては益々異文の距りは開いている。これを逆に校訂の跡を辿つて行けば共通原文に復原させる事ができる場合がある。例えば一七段「みさゝきは」の文は

紅 みさゝきは (1) しょううくるすのみさゝきは (2)
 時 みさゝきは (2) うくひすのみさゝきは

紅 かしはらのみさゝきあめの陵
 時 かしはらのみさゝきあめの陵

となつていて、これだけの短い文の中に四箇所の異語句があるが、これを諸本によつて變化の跡を辿つてみると

(1) の缺語は鈴鹿本の影響

(2) 「うくるす」三卷本（鈴鹿本祖本を通して）の影響

(3) 「しよろう」前田本によりミセケチ

(4) 「かしははら」前田本により補入

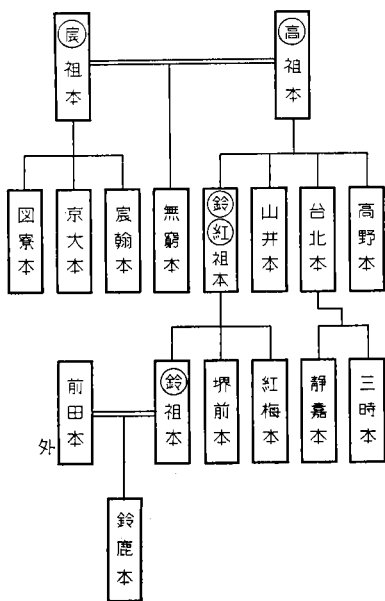
これを高野本と對照しつつ復原すると

高 みさゝきはしよろうくひすのみさゝきかしはらのみさゝきあめの陵

となつて共通祖文と思われる高野本の本文と同一となる。このようにはつきり變化のコースが分つているものは少いであろうが、校訂の原則的なコースがわかれば或る程度原態復歸もできるであろう。

堺本中最も他本の影響を多くうけたものは鈴鹿本で、奥書に九本を以て校訂したとある通り諸本との共通語が多く、前田本の外に三卷本・能因本があり、堺本の諸本の中では、紅梅本の外、京大本・宸翰本・臺北本・無窮本等がある。無窮本の場合も、前田本・三卷本・能因本に独自の共通語をもち、堺本内では宸翰本系の外、紅梅本・鈴鹿本・山井本・三時本と二本獨特の共通語をもつている。此の本は紅梅本に最も近いが、前表でみると各本との共通語の偏差が少く、宸翰本の場合最も共通異文の多い圖書寮本と、最も少い山井本との差七二〇語に對し、無窮本は最多、

最少の差は約二〇〇語である。この事は諸本との親疎關係が極端でなく、どの本にも比較的平等に共通して、堺本の祖本的性格を多分にもつている本の一つであるといえる。以上述べた事から、堺本の分化の過程を圖表として示すと次のようになる。



— 堺本の引用 —

源氏古註（一二六八頃）の引用文は枕冊子一七〇段「近くて遠き物であるが、此の文は他の三系統が「ちかくてとをき物」となつているのに堺本だけが一致する。（但し、文中「つゝらをり」は前田本と共通）

異本紫明鈔（一二九三）では十一例の引用が數えられるが、この中七例までが現行堺本の文と共通し、二例は現行文にない別文、他の二例は能因本・三卷本・前田本（堺本缺）の渾融文とな

つてゐる。異本紫明鈔の文は後の河海抄にも影響を與えてゐるが、その引用文は現行本の系統内異本の存在を既に示している。例をあげると、九二段「なまめかしきもの」では次のようになつてゐる。

なまめかしき物わらはのわきとことくしきうへのはかまなとはきてうつちくす玉なとつけてあぶさしかくしてかうらんそりはしなとありきたるなまめかし

以上の圈點の部分は堺本だけに一致する語句で、又語順も堺本だけに共通している。しかもこれを更に堺本の諸本と對照してみると、さしかくして、かうらん、そりはしなどありき等すべて無窮本に一致している。同じようにして諸本と對照してみると、

九三「なまめかしき物」——（鈴・紅・無・宸・圖）

一七〇「近くて遠き物」——（全本）

一九五「物語は」

（全本）

一二九「むとくなる物」

（無・宸・京・圖）

一四「市は」

（無・宸・京・圖）

三三〇「見くるしき物」

（全本）

となり、無窮本及び宸翰本系の本が異本紫明鈔に近い事になる。異本紫明鈔の著者は更に前時代の源氏注釋書である西圓釋を引用しているのだから少くとも異本紫明鈔の書かれた一二九三年以前に既に無窮本又は宸翰本が流布していたのである。

河海抄（一三六七）の場合は五二「にけなきもの」一二三「あはれなる物」三三〇「みくるしきもの」等何れも堺本としての特徴はつきりしているが、引用文が短い爲系統内諸本の特徴はつ

かめない。寧ろ河海抄は渾融的傾向があり、二一四「よろつた事より」は四系統渾融的であり、一四「いちは」の引用文は西圓釋の文とちがつて前田本の文に殆んど一致し、五二「にけなき物」の引用文は堺本よりも能因本の本文に近い。その他九一段「職の御曹司に」の引用文は能因本・三卷本の渾融文（前田本・堺本缺章）であり、「ふくいとくろき」「すさまじきもの」等現行本にない別文も含んでいる。（他の文は異本紫明鈔、十訓抄の引用文の踏襲である。）これで見ると河海抄の著者は西圓釋等の古註釋は參照しながら、枕草子には幾つかの異本がある事に留意し、數本を用いて引用したらしく思われ、その中には、現存しない異本もあつた事がわかる。

此の時代はまだ渾融的な文もあつたが、既にはつきりと堺本的特色があらわれている。これは當時枕草子は分化の度が進み、各系統毎に独自の異文をもつようになっていた事を示すものである。

——三卷本の分化と流布——

三卷本の第一類・第二類の別は池田龜鑑博士が本文の異同、卷の立て方條目の順序相違、缺卷の有無、奥書、勸物等により類別されたものであるが、最も決定的な條件である本文の異同の上から見ると、一類に屬する龍谷大學本（龍）勸修寺本（勸）中邨本（中）は、同じく一類の陽明文庫二冊本（陽）陽明文庫三冊本（明）圖書寮本（宮）の三冊の本と著しく傾向を異にしている。

例えば第一類、第二類ともに缺章のない一一九段〜一二四段の三卷本の異文七一につき集計してみると

陽・宮・明のみの共通語 二四語

陽・宮・明・龍のみ 一二

勸・中及び二類の " 一六

龍・勸・中二類の " 二〇

となり、龍・勸・中を含めた一類のグループは全く見當らず、逆に勸・中が二類とグループをなしているのが三六語にのぼる。この事は明らかに勸中の本文が一類ではなくて二類に属する事を物語っている。又、龍谷本は陽・宮・明グループにも、二類のグループにも入っているが後者の方が多く、二類に移行しかなかった中間的性格を示すものと言えよう。

兩類の成立については鈴木知太郎氏は第一類は第二類を底本として能因本（木活字本）を以て校訂したものとされ、楠道隆氏は第二類本は第一類本を堺本を以て校訂したと説かれ、池田龜鑑博士は第二類は後人の私意の介入した不純な本であると主張されている。大體に於て一類本が古いという説が優勢であるが、此の點についてはまだ研究すべき問題が残されている。

三巻本が或る時期に諸本集成を企てた事は既に一類本に「一本」として二十數章の別文を擧げている事により知られる。例らの文は現行堺本に多く存するし、特に宸翰本系の文に近い。例えば古典文庫堺本枕草子の六〇段、六三、六八、六九、七二、七三、七四、七五段などがそうである。しかし、同書六六、六七、六一、一〇四段等は現行宸翰本とは相當のちがいがある。尚、三巻本に補遺（朝日古典、枕冊子）として出ている二類本附載の本文は田中重太郎氏の指摘通り宸翰本系であつて殆んど現行本と

同文である。

一類の「一本」の追補が何時行われたかは確證はないが、一類では最古の寫本である陽明文庫本の書寫即ち一四七五年の教秀の奥書のある年より前である事は明らかである。毫及愚翁の奥書にある安貞二年（一二二八年）までに遡り得るとすれば當時既に一類本は堺本の影響を受けている事になる。一類本は堺本により變化をうけていないと説く學者が多く、ただ田中氏が類似の語句がある事を注意して居られるが、校本枕冊子について、一類本と堺本の兩系統だけに共通する語句を拾いあげてみると、相當數あり、特に一〇八段、二五五、二五六、二七一、二八三段等に多く、これらの文章及び語句は能因本等の脱落によるものとは思えない。

「一本」の追補か或はその前後に於ける一類本と堺本との交渉を第一次交渉とすれば、第二類本と堺本との交渉は第二次交渉と呼ぶ事ができる。前述の如く、補遺に見られる文は宸翰本系の文であるが、二類本には一類には見られない堺本系の校訂文があり、これは必ずしも宸翰本系ではない。例えば一二七段の「七月のすほう……」の文は堺本の紅梅本・無窮本・鈴鹿本に一致し、宸翰本とは少異があり、その他の本とは順序等にちがいがある。又一二九段「むとくなるもの」の二類本の本文の後半は堺本とのみ一致し、他系統本では「ねたきもの」の章段に入っている。この文を堺本系統の諸本と對照してみると、異文の數二〇の中、高野本一一、鈴鹿本一二、無窮本一〇、宸翰本 六語が二類本と共通する。この中三語は高野本とのみ共通し、又同じく三語は無窮

本とのみ一致するので、決定的に原據とされる一冊の本は擧げる事ができない。これは、この當時まだ堺本の文が現行本の本文と相當の隔りがあつた爲か、又はこの前に宸翰本系でない堺本と既に交渉があつたのか明らかでない。

堺本と三卷本との交渉は第二次だけに止らずまだ數次の部分的な交渉があつたと推定される。特に鈴鹿本單獨で三卷本二類との共通異文六例をもつているが、これは第三次以後の交渉と言えよう。

三卷本系統の引用文が確認されるのは、花鳥餘情(一四七二)の二一四段「よろつの事よりわひしけなる車に」の引用である。

所もなくたちかさなりたるによきところの御車人たまひよきつゝきておほくくるをいつこにたむとすらんとみるほとに

(後略)

圈點の語句は三卷本のみ共通し、其他の個所も全く三卷本通りである。此の引用は河海抄にもあるが、「よきところの一が」ときの「所となつていて、これは前田本や堺本と一致する。其他二七一段「成信中将は」一八五段「いみしう著き晝なかに」も三卷本系統である。花鳥餘情は引用に當つては嚴密な態度を持ち、河海抄・西園釋にある引用文でもそのまま無批判に踏襲することなく、原典にあつて確めた事がうかがわれる。

歌林良材集(一四六〇頃)の引用文は二二五段「社は」から引いたものである。長い文を抄出した文であるが原文に即しているので三卷本の特徴がはつきりみられる。「を」として「二は。かり」「かんたちめ大臣に」「七わたにまかれる」「ありとをしと

は」等の圈點の部分は三卷本とのみ共通している。

源語秘訣(一四七七)所引の文は、二〇三段「見るものは」中の文であるが、殆んど三卷本の本文と一致している。例えば「おなしさしぬき」が他系統本では「なをしさしぬき」となり「さうくしく乗たり」が他系統の本は「おさくしく乗たり」となつている。源氏古註から河海抄までを堺本流布時代とすると、これら歌林良材集・花鳥餘情・源語秘訣の時代(大體一四四〇頃〜一四八〇頃)は三卷本流布時代と言える。此の時代は又現行諸本の成立時代でもあつた。即ち

一四四七 「秀隆兵衛督大徳云々」(一類本)

一四六〇頃 歌林良材集

一四七二 花鳥餘情

一四七五 「藤原教秀云々」奥書(一・二類)

一四七七 源語秘訣

一五八三前 「清原枝賢云々」(一類・宮・明・中)

一五八三「申請陽明御本寫之」(一類中邸本)等と三卷本の諸本が活潑に書寫され、又種々の本が分化していた時代である。引用文についてみても、花鳥餘情の「よろつの事よりも」の文は三卷本一類(陽・宮・明)に近く、源語秘訣の引用文「見るものは」の文は一類(陽・龍・勸)二類(刈谷本・古梓堂本)に近い。他の文については短い爲諸本の特徴が捉えられない。

——三卷本の追補と成立論への一示唆——

三卷本に「一本」として追補されている章段は、枕草子の成立について一つの示唆を與える。三卷本がある時期に集成を企圖し

て、「一本」として二十數章を追補している事については前に觸れたが、これらの事情及び意義について考えてみたい。「一本」として追補されている章段の一部分を擧げると

胃	頭	三卷本	能本	堺本	前本
からきぬは	(能、前、殆同)	(一本七)	二九九	六二	九四
も	(能、前、殆同)	(一本八)	三〇〇	六三	九五
かさみは	(三、堺、異文)	(一本九)		六四	
おり物は	(能、前、殆同)	(一本一〇)	三〇一	六一	九八
あやのもんは	(能、前、殆同)	(一本一一)	三〇二	六〇	九九
うすやうは	(三、堺、少異)	(一本一二)		六五	一〇〇
すゝりはこは	(三、堺、異文)	(一本一三)		六六	一〇一
ふては	(三、堺、異文)	(一本一四)		六七	一〇二
すみは	(前、堺、同)	(一本一五)		六八	一〇三
くしはこは	(前、堺、同)	(一本一七)		六九	一〇五
かゝみは	(三、堺、少異)	(一本一八)		七〇	一〇四
まきゑは	(前、堺、同)	(一本一九)		七二	
ひおけは	(前、堺、同)	(一本二〇)		七三	一〇六
たゝみは	(前、堺、同)	(一本二一)		七四	一〇七

(番號は章段順序)

ここに擧げた章段は名詞的類聚段で、衣類・調度等身の廻りのものが多く、文章も殆んど名詞の羅列である。之等の章段はともと三卷本にはなかつた事は言うまでもなく、能因本には四段しかないが、類纂本系統には殆んど全章段存する。従つて、これらの章段は當初すべて存在していたものが、前田本・能因本・三卷本の順に脱落したとも考えられる。「尚「一本」の追補はこの外前後二七章段及び其の中で堺本は三章段、前田本は八章段能因本は一七章段缺いている。特に前表の部分は前田本は九四〜一〇七段にまとまり、現行本「春は曙」の巻の最後のグループとなつて居り、又堺本も六〇〜七四段にまとまつている。」

しかし以上の類纂原型論的な考え方とは逆に、成立の早い三卷本にはこれらの章段がまだ編集されていなかったのが、成立年次の遅い能因本や類纂本に漸次追加されて行つたとも考えられる。これらの章段が何れも比較の後の方に配置されているのも追加的なにおいが強い。即ち能因本は三〇二段で巻末に近く物の類聚の最後となり、堺本も「もののは的類聚」中大體に於て非動物的類聚の最後の方に位し、前田本では「もののは的類聚」の最後の章段となつて居る。

又、これらの章段は前田本成立の事情及び前田本成立當時能因本には前表の部分には四章しかなかつた事を示していると思われる。即ち、能因本缺章の「一本」一〜五段及び一二〜二一段の文は、前田本と堺本が殆んど一致するのに、間に挟まれた七・八・一〇・一一一段は、前田本と能因本は同文であるが、前田本と堺本

は著しく異つた文となつてゐる。これは前田本が、能因本の缺章の部分は堺本に據つたが七・八・一〇・一一は主底本たる能因本に據つた爲であると考えられる。「因に、前田本の類聚段は能因本に近いものが最も多く、校本枕草子上巻の類聚中、能本に近いもの四四章に對し、堺本八章、三卷本八章となつてゐる。」

「一本」の追補の中には類聚だけでなく、日記的なものや、隨想も含まれてゐるが、初期の絢爛たる色彩でなくて、くすんだ静かなものが感じられる。色彩にしても寒色系のものや薄色、枯色をよしと言ひ、隨想では彼岸的な想念が感じられ、又荒涼の美を説く事が多い。初期の「をかし」はかげをひそめて、「あはれ」の情緒が主流となつてゐる。試みに此の間の情緒的な語彙を拾つてみると、「をかし」二語・「あはれ」四語・「清し」四語・「たふとし」三語・「よし」五語となつてゐる。これらの事からも此の追補は作者が相當後年になつてから書いたと思われるが、その中に「一品の宮」とか、高階業遠歿後の記事らしい事があるので、岡博士の説にもあるように少くとも寛弘七年（一〇一〇）以後でなければならぬ。堺本も「ねたきもの」の章段の中に此の日記の記事を含んでゐるが、同系統の本が成立年時の遅かつた事を示している。これらの章段の中には能因本にも缺けてゐるものがある點からみて、堺本は能因本成立以後に書かれたものも拾遺的に編集したのであらうと推定される。

尚成立論については更に各方面から廣く精しく考究すべきであつて、以上は一つの示唆として擧げたに過ぎない。

——能因本の流布と前田本の成立——

花鳥餘情と同時代の弄化抄（一四七六）では既に能因本が引用されている。例えば三段「正月一日は」の引用は

まつりちかく成ては青くち葉二あゐなどの物ともを。おしまき
つゝほそひつつのふたにいれ紙などに……（後略）

となつて居て、圈點の部分は能因本特有の語句である。又二〇段「清涼殿の良のすみの」の引用も能因本と同一文である。

細流抄（一五二八）の引用は古註釋の踏襲四例の外は能因本系統の文で、例えば七〇段（草の花は）一七〇段「近くて遠き物くらまのつゝらをり」等そうであつて、後者は源氏古註・西圓釋・河海抄・岷江入楚等の堺本系の文「遠くて近き物」を能因本系の文に改めてゐる。

此の時代は能因本の諸本が相次いで成立流布した時代である。即ち

一四七六 弄化抄

一五二八 細流抄

一五三〇頃 三條西家本書寫

一五九六 十行古活字本刊行

一六二四 十二行古活字本刊行

一五九八 岷江入楚

一六一〇 前富岡本書寫、細川幽齋の研究

一六二四 十三行古活字本刊行

一六四三 慶安活字本刊行

一六四九 湖月抄

一六七三 湖月抄

室町時代末期以後の枕草子研究に於て能因本が主流的な地位を占めた事は、多數の活字本が能因本の本文を以て刊行された事や、當時の學者が此の系統の本を底本として註釋を施し、古註三書が著わされた事等によつて明らかである。

近世の註釋書の引用文は、根江入楚(二五例)湖月抄(八例)等を始め、源註拾遺(一六九六年)が一文、萬葉緯(一七〇〇年)が一文、源氏物語新釋(一七五八年)が一文あり、特に源註餘滴(一八〇〇頃)では四三例の多きにのぼる引用文があるが、これらの例は古註釋の踏襲以外は殆んど能因本系統に據つてゐる。特に後期のものには春曙抄の影響が多く見られる。源氏註釋書の外にも勢語圖說抄(一八一五頃)に一文、竹取物語補說(一八三五頃)に一文、勢語諸註參解(?)に一例枕草子の引用が見られるが、矢張り能因本系統の本文に據つてゐる。

能因本の分化の中で最も大きいものは前田本の編集である。前田本にたとえ原型本があつたとしてもそれを他系統特に能因本を以て集成的に校合増補した事はまちがいないと思われる。集成の動機としては能因本奥書にあるように、枕草子は人毎に持つてはいるが善本がなく又異本も多いので、よりよい定本を作らうといふにあつたらう。定本の形としてはできるだけ組織だつたものが望ましいので堺本のような類纂形式をとつた。その際事實彙歌枕等の分類も參考にされたと思われる。前田本が多くの説のように鎌倉の初期か中期に編纂されたとする、池田博士の説のように六

條家の清輔・顯昭・順徳院の分類等を参照したかも知れない。

集成的な性格としては先ず編纂形態が分類的、組織的である點が擧げられる。類聚の部は勿論、隨想の部に於ても、季節的なものを丹念に月を追い日に従つて順序よく配置し、次いで宮廷スケッチ、男性論、女性論、其他雜感等と緻密な分類的意圖のもとに編纂されている。日記的部分でも章段配列に年時順を志していた事は前田本勘物の年時考證が、一二例を除いて年時順になつてゐる事でも分る。然し現在の年時考證に比べると相當の出入りがあり、此の點でも前田本の編纂が相當後代であつたと推定される。しかし餘りにも分類意識、組織化に急な餘り、機械的、表面的に流れ、内面的な連關を無理に絶つたと思われる個所がある。現在の雜纂本についても一見雜然としてゐる章段も、西尾實氏や田中重太郎氏が徒然草の場合に指摘されたように來意の説を以て内面的なつながりが説明されるところが相當多い。それが類纂に急なる餘り、同一章段であつた文章まで二分三分されている個所がある。

又前田本には諸本集成の意圖が見られる。前田本は能因本を主とし、堺本を加えて集成されたと言われているが、三卷本要素も決して少しとしない。前述の諸系統共通語彙數の統計をみると、能因本と前田本約八四パーセント、前田本と堺本約七〇パーセントに對し、前田本と三卷本は約七七パーセントとなつていて共通語彙に關しては却つて堺本よりも三卷本に近いのである。

又四系統六關係中、前田本と三卷本の共通語彙が多い章段が校本枕冊子上巻だけで八章段存在する。前田本と三卷本一類に共通的

要素がある事を、田中重太郎氏はすでに指摘されているが、校本枕冊子の一五五段、一六二段、二五四段、二七三段等には三卷本一類と前田本だけに共通する語句が多くみられる。これらの共通語について楠道隆氏は能因本の脱落の爲だと説かれたが、そうでない例も相當發見される。例えば一六二段の「いとらやまし」という能因本の文は、三卷本と前田本は「いとめてたし」となつていて脱落の爲の一致ではない。このような例は決して珍しくない。要するに前田本が三卷本の文も集成している事は否めない。このように前田本は當時既に分化していた諸系統本（この中には現存しないものもあつたと思われる）をすべて集成しようとしたのであらうと思われる。

その際、脱落、誤記、合理化等の爲分化した幾つかの文や語句を集成しようとして前田本の章段は多くなり、文章も長くなつた事が考えられる。脱落したと推定される日記的部分の後半を除くと前田本の章段は類聚に於ても隨想に於ても最も多い。文が長くなつた例としては「山は」の章段に

「まぢかね山」(前・堺・能・三)

「まかね山」(前・のみ)

と二つの山を擧げているが、「まかね山」という地名は古來まだ文献に見られないもので、恐らく「ち」の脱落した本にあつたのをそのまま類聚したのであらう。このような例は、

「あしゝの山」(あらしゝの山又はあらし山の誤記か)

「おはらきの森」(おはあらしの森の誤脱か)

等に見られる。このようにして同一章段の文でも前田本は語彙が

多くなり、諸系統中第一位となつてゐる。試みに校本枕冊子上巻について四系統缺章のない章段の音節數の合計を擧げてみると

前田本 約二八五〇〇音節

堺本 約二七八〇〇〃

能因本 約二六五〇〇〃

三卷本 約二四六〇〇〃

となる。

日記的部分の人物にしても、前田本はすべて能因本による事をしないで、適當に取捨して採用している。能因本と三卷本の人物名が異なる場合、前田本が能因本によつてゐるもの七例、三卷本によつたもの六例がある。日時などに於ても兩者を混同して、二五六段では、能因本二月十日、三卷本二月廿一日とあるのを、始め能因本によつて二月十日としながら文の終りの方では三卷本の二月廿よ日を採用しているが、これなど不用意の編集ちがいであらう。(後の書入で二月十日と補正している。)

要するに前田本の集成には能因本(祖本)が底本となつたではあるが、堺本や三卷本の祖本など當時流布していた諸本をなるべく多く集成しようとした。然しそれにも拘らずまだその外の別本や異文があつたらしい。その事は當時或はその前後の引用文例例えば八雲御抄などの参考本が、前田本にも含まれない異文をもつた別本であつた事でもわかる。

前田本は成立後更に第二次的集成が行われた。即ち前田本には後人の手になると思われるミセケチや書入があつて更に本文變化を行つてゐる。それらの例二二〇例(主要なもの)について諸本

と照合してみると

	原	文	校訂後
諸本にない語		一四九	六九
諸本共通語		一二	二八
能因本とのみ共通語		一八	四〇
三卷本		一四	八
堺本		四	七
三卷本能因本		一三	三九
能因本堺本		二	三
三卷本堺本		三	二
その他		五	二四
能因本と共通語計		四五	一一〇
三卷本と		四二	七七
堺本と	二一		四〇

原文にも校訂文にも能因本的要素が濃い、校訂の結果更に能因本的要素が強くなった。

——むすび——

以上考察したように、枕草子は成立當初に於て既に幾つかの原

型本があつたと思われるが、成立後數十年乃至二、三百年頃の諸本の本文は現在本に比べるとまだ分化が甚しくなかつた。一面現行本にない別文もあつたと思われる。然るに一つの系統から新しい系統の本が編纂されたり、同一系統内に幾つかの異本が生じ、本文の方も誤脱、校訂等のために益々複雑に分化してきた。この傾向は中世後期から近世にかけて著しくなり、現行諸本及び春曙抄、盤齋抄等の多種多様の異本が成立した。

現在何れが原型に近いかについて種々對立した説があるが、これらの説を精確ならしめる爲には成立の事情を究めると共に、分化變貌した本文を原態に復するような作業も必要であらう。諸本の中には流布の間に著しく變貌した本文をもつものと、比較的原態に近いものとがあると思われるが、何れが原態であるかを決定する事は實際上は極めて困難で却つて本文を混亂させるおそれもある。主觀的な本文合理化が原態から遙かに逸れた思わざる異文を作る事は既に過去の校訂の跡を見れば明らかである。従つて原態復歸の作業及び原態推定に當つては極めて慎重な態度で臨むべきである。こうして分化變貌した現行本から、逆に當初の原型まで遡り得るならば成立の事情も自ら明らかになるであらうが、これは今後に残された課題である。

(昭三三・八・一〇)

合 計	踏 襲 文 計	別 文 計	混 合 文 計	堺 本 計	前 田 本 計	三 卷 本 計	能 本 計	一 三 一	二 二 六	三 三 〇	二 〇 〇	二 〇 三	一 八 二	一 八 五	二 七 一	一 九 五	くろ くろ と くろ と	一 二 三 三	五 二	三 三 〇	一 八 七	二 二 四	七 八	九 一	三 〇 〇	二 二	九 七	二 二 九	二 二 九	二 七 一 五	一 四	三 三 〇	九 三	九 三	一 四 一	二 三 二	一 七 〇	九 一	章 段											
一																						能 三 前	十 訓 抄																	源氏古註	1268頃									
一	一																																									紫明抄	1289							
一〇	二			六			二文																																				異本紫明鈔	1293						
二			二																																								原中最秘抄	1364						
一五	六	二	二	三	一		一文																																					河海抄	1367					
四	二	二																																										仙源抄	1381					
四	四																																											源氏一滴集	1442					
九	二	四					三																																						花鳥余情	1472				
二							二文																																						弄花抄	1476				
一																																													源語秘訣	1477				
六	四	一					一文																																							細流抄	1528			
一五	四	一																																												岷江入楚	1598			
八	八																																														湖月抄	1673		
三							三文																																								源註拾遺	1696		
九	六	二	一																																												源氏物語新釈	1758		
四一	六	六					二八文																																									源註余滴	1800頃	
六	六																																																源氏物語評釈	1861
八							一七																																									勢語四説	?	

外二 (+)〇	外三 (-)八	九一	一四六	外九 (+)四	一六三	外一 (+)〇	二一四	外三 (-)九	章 段	未 分 化 時 代
古 今 著 開 集	十 訓 抄	禁 秘 抄	八 雲 御 抄	無 名 草 子	千 載 集	寶 物 集	古 本 説 話 集	榮 華 物 語 集	後 拾 遺 集	文 獻 年 代 諸 本 備 考
一 二 五 四	一 二 五 二	一 二 四 一	一 二 三 八	一 二 三 一	一 一 九 六	一 一 七 八	一 一 三 〇 頃	一 〇 九 二	一 〇 七 八	一 〇 五 八 年
能・三・前	能・三・前		能・三 本	四 能・三	能・三 本	四 能・三 本	能・三 前	四 能・三 本	能・三 前	
安貞二年三卷本奥書										
定家歿										
能因歿——一説——										

諸本引用文一覽